

雪結色「お兄様！」八幡「はい？」

わんぐ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、比企谷八幡の家に、【雪ノ下雪乃】【由比ヶ浜結衣】【一色いろは】がしかも、妹とか言い出すし！

比企谷八幡のシスコラブコメは展開させる!!

目次

あの？皆さん変ですよ？	1
夢だと言ってくれ	4
俺お兄ちゃんになります！	7
妹ってのは、案外いいものだ	
雪ノ下雪乃はデレるとなかなかいいものだ。【前編】	12
雪ノ下雪乃はデレるとなかなかいいものだ。【後編】	15
こうして、由比ヶ浜結衣主催のお家デートが始まる。【前編】	20
こうして、由比ヶ浜結衣主催のお家デートが始まる。【後編】	23

あの?・皆さん変ですよ?

八幡「いやいや、はっ?何言ってるの?君たち?」

雪乃「お兄様?何か変ですよ?お具合が優れないのですか?」
俺の手を握りながら上目遣いで言った。

八幡「あのー?雪ノ下さん?何を言ってるっしやる?あつ!わかつたぞ、ドツキりだろ俺は分かるぞ昔中学頃やられたなく告白ドツキり!うんうんそうだそうに違いないな!」

結衣「何言ってるの?お兄様?癒しが欲しいのなら、この結衣が!」
由比ヶ浜が胸を頭に押しつけてきた。

八幡「イヤイヤ、これはシャレになんねえーってまじで!」

いろは「もう、このいろはの方が良かったのですね!そうならそうと早く言ってくれば!」

そう言うと、一色も由比ヶ浜と一緒に抱きついてきた。

八幡「おい!一色まで!冗談抜きでふざけるなよ!」

いろは「一色?雪乃お姉さまの事も雪ノ下つて、まさか!どこの馬の骨とも知らずの女に誑かされているのでないのでしょうか!」

一色は、頬を膨らませながら言った。

八幡「えっ?ねえお前らって何歳?」

この質問は、由比ヶ浜のアホさを試すための布石、由比ヶ浜なら俺と同じ17歳と言うはず!

雪乃「えつとわたくしは、16ですわ」

結衣「えつとわたしも16ですよ!お兄様?結衣の歳も忘れたのですか?」

いろは「私は、15になりますけど。お兄様変ですわよ?いろはが癒しますよ?」

八幡「いっいや大丈夫だ」

あつあれく可笑しいなく、等々夢だったとしてもこんな夢見てたなんて恥ずかし過ぎる。まじで!

八幡「あつあのさ、ちなみにだが何年生だ?」

雪乃「わたくしと結衣は、高校1年生ですよ?お兄様?わたしにや

れる事があるならなんでもしますよ?」

雪ノ下が赤らめて言った。

結衣「それはそうでしょ? お兄様? 私と雪乃姉様は、双子なのだから」

いろは「いろはは、中学3年生なのです!」

八幡「そ、そうだったな! そう言えば」

いろは「そうですね! 朝の食事の用意が出来ます! 行きましよう! 八幡お兄様!」

八幡「おっおう」

一色が引つ張るのにそのままついて行った。というか本当に大丈夫か? 俺? あとで病院いこう! そうこれは夢! 多分変なVRMMOに囚われてる! そうだそうなんだそれしかない!

いろは「お兄様! あーん。どうですか? お味は? 今日、雪乃お姉さまが作ったんですよ?」

八幡「あつあく上手いぞ」

雪乃「そうですね! 良かったです! あの、食事の後の事なんですけど! 私と! その、デ。お買い物行ってくださいませんか?」

雪ノ下が上目遣いで質問した。

多分ここで断ると、また怪しまれる。

特に用事は無さそうだし、まあいいか。

八幡「おういいぞ」

雪乃「そうですね! 雪乃は、嬉しいです!」

えっなんなのこの子? ツンが無くなちゃったよ! はあまあいいか。夢だしな!

あつあと「流石お兄様です!」とか言い出したらやばい! ホント!

結衣「ずるいですわ! 雪乃お姉さま! 私も行きたいです!」

いろは「そっそうですね! 私も一緒に行きたいです!」

八幡「いやなあく雪ノ下が頼んだんだ。お前らはまた後でだ!」

結衣「すっすいません。うう。取り乱してしまいました。雪乃お姉さまも申し訳ありません」

いろは「いろはも取り乱してしました。ヒクヒク申し訳ありませ

ん」

雪乃「いいのよ。2人共、ねっ？泣き止んで？」

あっそうか、百合ワールドは健在か。

雪乃「八幡お兄様？変な事を考えてませんでした？」

八幡「いついやなんでもない」

くそっ心を読むスキルは、まだ落ちてないという事か！

八幡「じゃご馳走様。美味しかったぞ」

雪乃「はい！」

夢だと言ってくれ

八幡「どっこいしょ」

俺は親父くさい掛け声と一緒に体を持ち上げた。

雪乃「あつ、あのお兄様？約束は、」

八幡「あつあく覚えてるよ。どこに行くんだ？」

雪乃「えっと、ちかくのデパートで洋服が欲しいです！」

そう言えばここって千葉なのか？まずこの家は、どこにあつてどの部屋が誰の部屋なんだ？まあそんなことは外に出れば解決する問題だ。てか夢だとしてもなんで豪邸にすんでんだよ。俺が怖いな。

雪乃「お兄様ー！ご準備はできましたかー？」

俺の部屋は二階で、下の階段から呼び掛けてくる。

八幡「あつあく出来たぞく今行く」

急に扉を開けたせいだろう、扉の前にいた猫に気付かず躓き階段から真つ逆さま。

八幡「うつうく痛てー」

雪乃「お兄様！お怪我は？」

多分下にいたが1階にいたが音が響いたのだろう。雪ノ下は、心配してきてくれた。

雪乃「今すぐ、救急箱を持ってくるので、待ってて下さい！」

八幡「あつあくありがとう」

つてあれ、おかしい何故、痛みを感じる。ベットから落ちていたとしても起きるはず、というか、普通夢は現実と分らないはずだし何故ここが夢だとわかった？やばい！混乱してきた。助けて！アン○マン○

結衣、いろは「お兄様？大丈夫ですか？」

部屋にも聞こえていたのだろう。由比ヶ浜と一色が心配しに来てくれた。

八幡「あー大したことはない」

結衣、いろは「よかつた」

雪乃「お兄様！膝と肘を擦りむいてらっしやるじゃないですか！」

そう言うと、雪ノ下は絆創膏をぺたぺたと貼りまくった。

八幡「なんだその：サンキュー」

雪乃「いえいえ、私が急がせたのもありますし」

八幡「あのさ、まだ時間待ってもらっていいか？」

雪乃「は、はい！大丈夫です」

八幡「まあなんだその「お兄様」っていうのやめねえーか？」

雪乃、結衣、いろは「えっえとその呼び方を変える…と？」

八幡「あくそうだそのなんだ、言ってくれるのは嬉しいが肩苦しい
というかなんというか、」

結衣「わかりました！そのおにい？でいいかな？／／／／／／／／

いろは「だったら私は、メジャーなお兄ちゃんで！／／／／／／／／

雪乃「すいません、私は変えるつもりはありません。「お兄様」とい
う言葉には、いろんな思いがあるので、すいません。わがままな妹
で。ウルウル」

八幡「あつあー別に提案だから言いだぞ別に！なっ？泣くなよ」

雪乃「はいグスンあの、買い物の件なのですが、また今度にしましよ
う！埋め合わせしてくださいれば構いませんが？どうでしょう？」

八幡「あつあくそうしてくれると助かる」

ピンポンとチャイムがなる。すると一色が玄関を開けてでる。

「あつくお兄ちゃん！ここだったんだね」

聞き覚えある声だ、いつも聞くあの声。

小町「どしたの？お兄ちゃん？あつそうかまだ起きたばかりだから
かな？比企谷小町！正真正銘の、『妹』だよ！」

いろは「えっどういうこと？」

八幡「あれ？やばい俺、正真正銘の妹まで夢にだすとは、我ながら
気持ち悪いな」

小町「やつぱりか、お兄ちゃん！これは、夢じゃありません！」

八幡「はへっ？」

小町「だ、か、ら！夢じゃないげんじつです…よー！」

「よー」と一緒に俺の頬は真っ赤に腫れていた。確かに現実だ。め
ちやくちや痛てーし！

小町「ね？わかった？小町の愛のビンタ？あつ！小町的にポイント高い!!」

八幡「あつあくわかった。事情を説明してくれ」

雪乃、結衣、いろは「えっ？さつきから誰？」

俺お兄ちゃんになります！

小町「えつとねえくなんて言うかね。つていうか雪乃さんたち聴かれたらちよつと不味いんだけど？お兄ちゃん」

小町ちゃん？一色の特権『上目遣い』だよ！うわつなんかカツコイイ必殺技みたいだな。一色も限れば頑張れば『超電磁砲』と出せそうだもんうん。あつあと俺なら、『独り(ポツチ)』使えるよ！常時発動型だけどね！なんか悲しくなってきたな。そんな事を思っていると

雪乃「あのお兄様？その方は？」

不信感を抱いたのか、細目で睨めつけるように小町を見る。

八幡「お前、小町だぞ？俺のいもう…」ちよつと！お兄ちゃんシー」あつああ

結衣「おにい？その人を妹って言いかけなかった？」

八幡「いついやちげーよほらあの芋屋さんの娘さんほらいただろ誰だっけほら川田さんみたいな名前の！」

結衣「いついたっけ？」

八幡「とにかくくだ！お前らはとおおい所へ買い物へ行つてくれ！」

雪乃「わつわかりました。行つてきます」

雪乃「では皆いきましよう。お兄様の邪魔をする訳にも行かないし」

いろは「はーい！じゃ行つてくるね！お兄ちゃん！」

小町「この浮気もの、」

小町がボソリと呟くと同時に雪ノ下一行は買い物に行った。

八幡「いついや小町勘違いされる様な言い方は辞めようね」

小町「まあいいや！妹キャラを取られたのは、少し寂しいけど、」

八幡「まあなんだその、ここが現実でも夢でもさほんとの妹は小町、お前だけだ」

小町「うん！ありがとうでもそんな談笑をしている場合じゃないんだよねえ、まずお兄ちゃんこの記事を見て」

その手渡された、記事を見ると。

「千葉県、総武高校男子生徒1人と女子生徒3人が昏睡状態」という内容が書いていた。正直めちやくちや驚いて、かつすぐ気づいた。俺たちの事だ。

八幡「なあ小町もしかして」

小町「そうお兄ちゃん達のこと」

八幡「でもここには『昏睡状態』って」

小町「まあこれは、ハツタリにしか過ぎないよ。っでここは、何処と思う？」

八幡「まあ千葉県内ではないな」

何故県内じゃないかと分かるか、それは俺は千葉県内の地図を知っている。暇すぎて、Googleマップで千葉って検索したら大体出てくる！うん！あつあの嘘です。そうです。ストーリーキングもどきをやった事があります。はい。「キモツ」とか言わないでね『もどき』だから!!

小町「ほほうよく分かったね！流石私のお兄ちゃん！あつ今の小町のポイント高い!!」

八幡「はいはい」

小町「で何処かというところは、日本県内の雪ノ下家の所有地の島だよ」

八幡「つてまさか、あの人も「はろはろ」ゲツ陽乃さん」

陽乃「あらあら酷いなく比企谷君ってばくでも！そういう所も私は好きだぞ！」

八幡「ハイハイ」

小町「まつまあ続きなんだけどさ、覚えてる？あの時の出来事」

その瞬間八幡の脳裏になにかがよぎった。

陽乃「知っている名前のはずだよ、比企谷君『葉山桃矢』の事を」
その時、八幡は強烈な吐き気が襲ってきた。八幡は、薄々分かっていた。アイツの名前が手で来ると。そして、急いでトイレに行き、全てを吐き出す。

陽乃「ごめんなさい比企谷君、急に名前を出して。でも吐いたって事は、もしかして君気づいている？」

八幡「まあ少しは。あの時は地獄だった」

陽乃「ごめんなさいね。本当に、あれは雪ノ下の失態だったはごめんなさい」

八幡「陽乃さん頭を上げてください、あれは」

陽乃「いえあれは完全に家の責任だわ、ガハマちゃんにいろはちゃんまで巻き込んでしまったわ」

八幡の意識は、『あの時』に遡る。

あれは、7月上旬だった。いつもと変わらずに奉仕部でなんにも考えず、ボーツと本を読んでいた。その時、

???「すいませーん、いらいなんですけど」

雪乃「はいえっ、えっとノックをって、」

雪ノ下は、すぐ分かった。両手に拳銃を持っていた。それは雪ノ下の顧問弁護士『葉山桃矢』だ。

桃矢「あのく少し眠ってくださいかね」

比企谷「お前ら誰だ！」

桃矢「ああ、そう言えば君は隼人のクラスの、比企谷君だっけ？ごめんねー巻き込んだじゃって」

八幡は、少し理解する事に時間が掛かった。50代半ばだろう。そして、葉山の事を隼人と親しげに

雪乃「葉山さん、何のようですか!? 貴方は、雪ノ下の弁護士は辞めたんでしよう! なんで!? お金? 弁護士への復職? ならいくらでもします!」

桃矢「ちげーよ!! 雪乃ちゃんよー! 俺はさく雪ノ下家には、全力でさくフオローしてきたんだよ! それをさ、俺の失態ならまだしも雪ノ下の失態をく俺に! この俺に! ああもおー!! 腹が立ってきた。まずは、お前達眠ってもらから!」

そこから、八幡は覚えてはいなかった。

いや思い出したくはなかった。

小町「お兄ちゃんく! おーい!」

八幡「おっおう、ごめんボーツとしてた」

小町「うんまあさっきの続きだけど、お兄ちゃん達、雪乃さん、結

衣さん、一色さんはある薬を飲まさせてる。麻薬『LOST』一部の記憶と一部の記憶を暗示させ、記憶ショックを起こす薬」

八幡は、息を飲んだ。

八幡「ということとは」

陽乃「そう、雪乃ちゃん達は、完全に比企谷君の事を『兄』として見てるんだ」

八幡「治す薬とかは？」

陽乃「今、雪ノ下と警察庁が急いで開発してる」

八幡「そつそうですか、つでいつ頃完成するんですか？」

陽乃「それがね、3ヶ月後なんだよね、あはは、」

八幡「それ本気で？」

陽乃「うん!!」

八幡「そんな満面の笑みでいわれても、はア」

陽乃「まあ雪乃ちゃん達とおくハーレム生活が出来るんだ・か・ら」

陽乃が耳元で囁く。

八幡「あのなあ」

陽乃「あつ雪乃ちゃん帰ってきた！じゃあ私達は帰るね。じゃあお邪魔しました」

タタタと急いで帰る。

いろは「ただいまくお兄ちゃんー！」

八幡「うをお！一色、いきなり抱きつくな！」

いろは「えつえつとすいません、お兄ちゃん嫌だった？」

もくだからこの子は、『上目遣い』を頻繁に使うんじゃないよ。俺のHP無くなっちゃうよ？

八幡「嫌じゃないけど、いきなりはするなよ」

いろは「はっはい!!」

くしゃくしゃと頭を撫でる

すると、

結衣「おにい！もう！いろはだけ！」

八幡「わかったよ、すればいいんだろ」

由比ヶ浜の頭もくしゃくしゃと撫でる

結衣「うんうん！それでいいんだよ！おにい！」

雪乃「お兄様!!」

八幡「ひゃっひゃい」

雪乃「雪乃もお願いしてもよいですか？」

八幡「あっああ」

雪乃下の頭もくしゃくしゃと撫でる。

雪乃「お兄様、私にはなんでも言ってくださいね！」

それは、素の雪ノ下が見れたような気がした。

八幡「ああお兄ちゃんは、雪乃を頼るよ」

雪乃「はい!!」

妹つてのは、案外いいものだ

雪ノ下雪乃はデレるとなかなかいいものだ。【前編】

俺は、小町と陽乃さんをあやふやに説明した。

外で雷がゴーゴーと鳴り響く。

そして、部屋に戻り……

八幡「ハハハハハハ……お兄ちゃんだてっ！お兄ちゃんだてっ
さー！バツカじゃねえの！バーカ！バーカ！俺のバーカ！」

小学生かよ……

雪乃「お兄様？大丈夫ですか？」

雪ノ下がドア越しに話しかける。

八幡「あつあぁーあれだ、あのつ材木座と話してたんだよ」

雪乃「材木座さん？お友達ですか？」

八幡「まあ、そんなもんだ。てか雪ノし、雪乃部屋入れば？」

雪乃「はっはい！入らせて頂きます」

八幡「つでどうしたんだ？」

雪乃「あの、お兄様が不審な喚き声を……」

八幡「そっそうか」

雪乃「あのそれと、雪乃はカミナリがどうにも苦手で……その一緒に
寝てもいいですか？」

八幡「ひやつひよっひよれば（雪乃）「お兄様？」（八幡）「いっいや
不味くないか？その男女が2人同じ部屋で……（雪乃）「お兄様？雪乃達
は兄妹なので、あつ不快でしたか？私の提案は」（八幡）「いっいやそう
だよな！兄妹だしでも誰にも言うなよ」

雪乃「はい！」

やばい、やばい、やばい！どうしよう！絶対なんか言われる。でも
！ゆきのんの提案だしね☆

やべえくキャラ崩壊だ。冷静になれ、比企谷八幡今は、兄妹、妹な
んだ！よし大丈夫！

八幡「じゃっじゃあ、俺は床で寝るから」

俺が言った瞬間服を少し引つ張った。

八幡「んっ？なんだ？」

雪乃「あの、雪乃はベットで：お兄様と寝たいです…」

八幡「はあ、わかった。今回だけだぞ」

雪乃「はっはい!!」

つべわー。まじやべーわー。あれキャラ崩壊だ

落ち着け比企谷八幡、冷静になれ、俺よし

この幻想をブチ壊そう！はあ、不幸だー!!

やめよ。

八幡「なっなら、おれは外側で寝るから」

雪乃「はい」

しーんつとしてる。想像以上にしーんつと。

あーっ。喉乾いた。あれっ動けない。

振り返ったら

雪乃「ううう…」

八幡「どうしたんだ？」

雪乃「あのっヒッ！コッ怖い。ううう…」

何この生物可愛い。こんなデレのん間違つて…いないな!!

雪乃「お兄様く頭撫でてくださっヒッ」

八幡「ああ、ヨシヨシ」

雪乃「ありがとうございます。お兄様、今だけでいいのですが、お

兄ちゃん…と呼んでいいですか？」

八幡「ああ、ヨシヨシいいぞ」

雪乃「ううう…ありがとうございます。お兄ちゃん」

なんなのこの子やばい襲つちやいそうだ。

あの嘘です。そんな度胸は八幡にはありまー…せん！やめ

よ。

八幡「なんだその明日埋め合わせ、するか」

雪乃「はい！雪乃は楽しみです！」

眠れん!!

翌朝

何かが俺の上に乗っている。重くはないが寝がいきりができない。

八幡「はあ、んっふう」

結衣「おにい！雪乃お姉ちゃんとなんで寝てるの!？」

八幡「ハチマンヨクワカンナイナー」

結衣「お・に・い！」

八幡「わかつたよ、雪乃がカミナリが怖くて一緒に寝たいって言うから」

結衣「いや、それはまだわかるよ!?!でもさ、一緒のベッドで寝るところはないでしょう？」ギロツ

八幡「なつなあ雪ノし、雪乃なんか言ってくれよ」

眠っている雪ノ下を起こそうとした時、

雪乃「んっお兄様やめ…て」

結衣「へえくおにいはいはー?これでも何か言うと?」ギロツ

八幡「いえ、なんにもありません」

一色と由比ヶ浜から色々と言われた。

正直あんま聞いて無かったけどな。

でも由比ヶ浜さん、ちよつと怖い。

雪乃「フフ……お兄様」

雪ノ下は眠りながら、声を漏らす。

雪ノ下雪乃はデレるとなかなかいいものだ。【後編】

雪乃「んっううお兄様？どうしました？そんなにシヨンボリして」
八幡「いついやなんでもない」

お兄様は、なにか私に隠している。でもお兄様が話したい時に話せばいいと思う。

なにかお兄様の背中には、無性に抱きつきたくなる。少しなら…ね？

八幡「ヒツなっなんだ？どうしたんだ？」

雪乃「おとおおおお兄様？元気がないようですたい、雪乃が慰めて上げますけどしますたい」

八幡「おい、日本語になつてないぞ！別に元気がない訳じゃないから、っな？慣れてないことするな」

雪乃「すいません、お兄様」シヨボン

八幡「ヨシヨシ大丈夫だ、お前の兄貴はこのぐらいでへこたれない」

結衣「お・に・い？まーたー！」

八幡「ヒイイイーーーーーー」

その後、由比ヶ浜と一色にまた説教された。

なんかペチャクチャと喋っているが内容が全然入らない。

雪乃「結衣？お兄様に私がして欲しいと言ってしてくださいったの、お兄様に責任はないわ」

結衣、いろは「そっそこまで言うなら」

雪乃「お兄様？雪乃は、着替えたいのですが」

八幡「あっあく出ていくよ」

あれ？俺の部屋じゃないか？まあいいか幸い本はコツソリ持ってきたし。

ゴソゴソとドア越しから雪ノ下、由比ヶ浜、一色の連中の声がする。なんだか、覗きをしている気分だ。

雪乃「ちよっちよっつとやめなさい！」

結衣、いろは「よいではないか」フフツ

雪乃「ちよっちよっつと！」

その瞬間、俺の背中中は真つ逆さま、見上げた先には、縞パンあれ？
だれの？そう！雪ノ下！ってー！

雪乃「お兄様く!!」ギロツ

八幡「ヒツヒイイー!」

それから、雪ノ下にも色々言われた。

ペチャクチャ赤らめて、はあとため息を着きながら

雪乃「まあ、これはそこの結衣といろはのせいでもありますしね？」
ギロツ

結衣、いろは「ヒツ

雪乃「まあいいです。もう済んだことは、でも、そんなに雪乃の下
着姿が見たいのであれば」ボソツ

八幡「んっ何か言ったか？」

雪乃「いついえなんでも：お兄様のバカ」ボソツ

あれ？バカってだけハッキリ聞こえたよ!?八幡傷ついちゃう!

八幡「まあなんだその、お詫びと言うか、服、買いに行くか？」

雪乃「いいのですか!？」

八幡「まあ暇だしな」

雪乃「ありがとうございます！ならすぐ支度を！」

タタタと階段を上り準備をしている。

何であんなに嬉しそうなんだよ。ただの買い物なのに、

雪乃「おっお兄様？この服は雪乃に似合っているでしょうか？」

うっ上目遣いやめろ!!

お兄ちゃん間違え惚れて告って振られちゃう!!いや振られちゃう
のかよ：

八幡「あっああ似合ってるよ」

雪乃「では、行きましようか。結衣くいろはもく戸締りして置いて
ねえく」

結衣、いろは「はーい!!」

ドアを開けて、から15分ほど歩いたら、見たこともない豪華な街、
という感じが初めて見る人の感想なのだろう。

八幡「雪ノ下家って一体……」

雪乃「雪ノ下??」

八幡「あついやいやなんでもない」

ふう、良かった。ちびまる子ちゃんのアレーションばりに『つて一体…』を使っちゃったよ！なにいつてんだ俺。

しかし、本当にあの家の総資産つてどのくらいあるんだよ。島を買い取つて、デパート、駐車場、ガソリンスタンドまでいや、つていうか俺たちの他に誰か住んでるのか？そういう疑問が直ぐに出てきた。

雪乃「お兄様？どうしましたか？雪乃と居るのはそんなにつまらないでしょうか？」

八幡「いや違う違う。考え事をしていてだな。決して、つまらなくないぞ！」

雪乃「は、はい」

しばらく沈黙が続く……

雪乃、八幡「あの」

八幡「えっえっと、雪乃からいいぞ」

雪乃「で、ではお兄様、手を繋いでもいいですか？」

上目遣いやめろ、惚れちやうだろ。

まあ別にくく俺達は『兄妹』だしね？セーフだよ！多分……

八幡「ひやつひゃい」

雪乃「で、では」

また、しばらく沈黙が続く

どこからか、定員の呼びかけが聞こえる。

店員A「そこのお客様くカップル割で1000円OFF！」

雪乃「お兄様、私達つてカップルに見えるんでしょう？」

八幡「そっそうかもな」

雪乃「あの、あそこによって良いですか？」

八幡「おっおう」

雪ノ下が指を指したのは、如何にもっとという洒落た雑貨屋だった。

雪乃「わあく可愛いく」

雪ノ下が見ていたのは、可愛らしいピンキーリングだった。

八幡「なんだその、欲しいのか？」

雪乃「いい、いえそんなつもりは、」オドオド

八幡「いいよ、これ欲しいんだろ？」

雪乃「で、でも」

八幡「いいんだよ、こういう時には男のプライドがあるんだよ」
レジにいつて、値段を見たら「桁間違ってるんじゃないかというレシートだった。」

雪乃「ありがとうございます！」

八幡「別にいいよ。埋め合わせだ、これぐらいはしないとな」

雪乃「わあくありがとうございます」

ピンキーリングを雪ノ下に渡すと、右手の人差し指にはめた。

八幡「どうだ？」

雪乃「はい！ピッタリです！お兄様、ありがとうございます！」

八幡「そうか、なら良かったよ。もう暗くなってきたし帰るか」

雪乃「はい！」

しばらく歩き、家に着いた。

八幡「ただいま」

いろは「もう！遅い！お兄ちゃん！」

プクッと膨れた頬を俺に向けあざとく言った。

八幡「悪い悪い」

そう言いながら、一色の頭を撫でる。

いろは「そうそう、それでいいんだよ」フフツ

雪乃「さあ夕食の準備しないと」

いろは「雪乃お姉ちゃん、もう大丈夫！今日は、いろはが作ったのですく！さあさあ、ゆつくりしてて下さい！」

一色が雪ノ下の背中を押しながら二階に押し返す。

八幡「なら、俺も少し寝るか」

俺は直ぐに部屋に戻って、ベットで寝た。

コンコンとなるドア。

雪乃「お兄様？入ってよろしいでしょうか？」

八幡「んっふう」

雪乃「フフツお兄様たらっまだ寝てらっしやるのね」

俺の頭が浮く。そして意識が戻り、この状況が直ぐにわかった。雪ノ下に、膝枕されてる！

雪乃「もう、お兄様は」

膝枕されながら、子守唄を歌われる。

また、眠気が襲ってくる、

八幡「ふあゝ」

雪乃「お兄様？起きましたか？」

八幡「あゝあゝって」

2人の顔が赤らめてくる。

その理由は子守唄を歌いながら俺の手が雪ノ下の胸に直で当たっていたから。

その後、由比ヶ浜と一色に散々言われた。

こうして、由比ヶ浜結衣主催のお家デートが始まる。
【前編】

ふう、なにかが俺の下半身に乗っている。
知っている、この程よく甘い匂いを。

結衣「おにい！起きてよお〜」

八幡「お前なあ、毎日毎日、俺の囁かな楽しみを壊さないでくれな
い？」

結衣「あつ起きた起きた〜、ヨシヨシ」

八幡「はあ、つで？なに？何しに来たの？」

結衣「えっ、えーつとねえ〜」

八幡「さては、人の眠りを！邪魔しに！来たのか！」

知っている、由比ヶ浜は、押され弱いと。

結衣「うううう」グスン

八幡「まあいい、でもな？休日ぐらいゆつくりさせてくれ、なっ？」
ヨシヨシ

結衣「わかつた〜」

八幡「ヒッ

知っている、この感触を、由比ヶ浜のたわわの様な胸だ割れながら
これには弱い。

結衣「許してくれる？」

やめろ！『上目遣い』は！それは、旧一色の伝家の宝刀だぞ！

八幡「わかつたならよし！」ナデナデ

いろは「お兄ちゃん？何してるのかな？早く降りてこようね？」

一色さん？なにか燃えています！後ろから！家事ですよー！助けて
誰か〜

一色に連れられて、一階に降りた。

結衣「もう、おにいたらっ〜」

あーだこーだ言いながら、俺の寝癖を直す。

八幡「あーもう、いいよ！」

結衣「まあまあ、遠慮せずにく」

八幡「はあ、」

こいつは本当に、今の由比ヶ浜は、お姉さんぶりたんだろう、いわゆるゆきのん化だ。

はあ、まあこいつがやりたいんならまあいいや。

鼻歌を歌いながら、寝癖を直す。

結衣「ソフフ……」

八幡「はあ、」

結衣「あつ、ため息ついたー！」

八幡「いやため息じゃなくてだなあ、はあ、」

結衣「あー！また！わかった！ならさそのお詫びに、その、結衣の頭を撫でてもいいよ？」

由比ヶ浜が恥じらいながら言い放った。

八幡「いやいや、なんでそうなるんだよ」

結衣「あーもう！いいじゃん！」

八幡「わかったよ」ヨシヨシ

結衣「うんうん、それでいいんだよ！」

ふと、我に返る。何をしている。

比企谷八幡、お前だけなんだよ！あの真実って奴を知ってるのは、お前だけなんだよ……記憶があるのは……

結衣「おにい！どうしたの？ポーツとしてく」

八幡「すまんすまん、ちよつとな」

気が付いた時には、雪ノ下と由比ヶ浜、それに一色がいる、奉仕部の姿が垣間見れた。

いろは「お兄ちゃんくおーい！」

雪乃「お兄様？熱でも？」

八幡「いついや、大丈夫だ」

結衣「あの……さ、おにい今日暇でしょ？」

八幡「あつ、ああ暇だけど？」

結衣「その、結衣とき、デートして！」

八幡「あつああ、いいけど」

いろは「あーずるーいー!」

雪乃「こら、いろは食事中よ?」

いろは「はっはい……………」

雪ノ下さん! 尊敬ツス!……………でも、今は…こいつらの思いを叶えてやることしか出来ないしな…………

八幡「つで? デートって何処でするんだよ」

結衣「えーつと…此処とかどうかな?」

八幡「はっ? 家でか?」

結衣「うんそう…だめ?…かな?」

八幡「いっいや、いいけど楽しいのか?」

これはいわゆる、お家デートなのだろう…なんか普通に言ったら恥ずかしいな。

結衣「フフフツ」

由比ヶ浜の不敵な笑みが表情からでる。

こうして、由比ヶ浜結衣主催のお家デートが始まる。

【後編】

八幡「っで？なんでこうなった？」

今、俺の状況は、いわゆる修羅場である。

睨む雪ノ下、ニタニタと笑う一色：殺意ってやつだね？

そして、しまいには由比ヶ浜ときたら、今俺の右手を掴んで離さない、困った子だ

結衣「ふふーん」

何勝ち誇ってんの？こいつは本当に…

八幡「なつなあとランプでもするきあ」

思わず声が裏返った。恥ずいやべー！恥ずいめちや恥ずい

…：こうして俺の黒歴史のページの一枚になるのだ。ハハハハハハ
…

結衣「結衣はいやあくだつて今日はず、結衣とおおにいとこのデートだもん！」

雪乃「まあ、しょうがないわね。あつあと襲ったら？どうなるかわかりますよね？お兄様」

八幡「わわわ…かってるよ」

雪乃「いろは、行きますよ」

いろは「ではではなく、お二人共ごっつゆくりく」

しばらくの沈黙…なんなんだよこの感じ、息苦しいなあ〜ホント。

結衣「あつ、あのさおにいの事さ、八幡って呼んでいい？／／／／／

八幡「あつああ、」

結衣「八幡？」

八幡「ひゃい！」

思わず出ちまったよ！てか何故、疑問系？

結衣「八幡！」

八幡「ああ」

結衣「八幡ねえ〜八幡〜」

なんなのこの子は、本当に馬鹿の一つ覚えみたいにはあ、まあこれも由比ヶ浜らしいと言えそうなのかもしれないな。

八幡「なんだよ」

結衣「いや、呼んでみただけだよ〜」

なつなに！めぐりんパワーが滲み手でいるだと！コイツ…やるな！馬鹿なのか俺は…

八幡「そっそうか…」

結衣「あっそうだ！ならさ、結衣って呼んで？」

八幡「いや、呼んでるだらういつも」

結衣「そっ、そっか。むむっ」

八幡「ところで、結衣は何したいんだ？」

結衣「だから、お家デート」

八幡「いや、お前がこのままでいいならいいけどよ、いつもこんな感じだよな？」

結衣「そっそういえば！そうだ…」

うーん、この子は、本当にアホな子だ。由比ヶ浜は、ふと思いついたように立ち上がる。

結衣「そっそうだ！おままごとしようよ！」

八幡「はっ？この歳で？」

結衣「いっ、いいから早くしよ！／／／／／」

無理やり、台所に連れてゆかれる。あつあれ、なんか忘れた。そうだ、あの由比ヶ浜に調理台に立たせてはいけない暗黙のルールがあった！どんだけなんだよ…

ふふーんと鼻歌を歌いながら厨房に立つ。

八幡「おっおい！」

結衣「んっ？なに？」

八幡「俺が作るから、あつちでゆっくりしてくれれ！いやしてください！」

結衣「えっ？なんで？」

八幡「いや最近の日本文化に習って、男の人が立った方が、スピー

デーでハイリターンでノーリスク出切り抜けられるだろ？その、コストも男の方がぎつくりしてて、コスト軽減にもなるしな？」

結衣「言ってることはよく分かんないけど、わかった！」

あー良かった〜ホント、てか俺の言動矛盾してないか？まあ、いいやどつかの玉なんとかさんみたいだったな、いや今回限りでは、玉なんとかさんには救われたな、ありがとう！玉なんとかさん！元気で！なんか、死んだみたいだな。

さて、何を作ろうか。

うーん、朝飯だ目玉焼きが王道ちや王道か。

目玉焼きに諦めが着いたのか、着々と2人分を作っていく。

結衣「えいつ」

八幡「えーつい、鬱陶しい！「きやつ」あつすまん、ごめん強くやり過ぎた」

八幡が強く手を振ってしまい、結衣がフローリングに倒れ込んでしまう。

結衣「ぐすん」

八幡「いや、本当にすまん！」

思わず土下座してしまう。これで君も、社畜スキルをマスターしたね！脳内思考の中でこれだけ取り乱してしまっただけで動揺してしまうとは：

結衣「ちがうちがうの。私がね泣いてるのは…その、八幡はさ私の事嫌い？」

八幡「えつ、なんで？」

思わず質問されてんに質問で返してしまう。彼女から出た言葉は、あまりに彼女らしくなかったのだ。

結衣「だって…いつも結衣という時は悲しそうにしてるんだもん」
何かが八幡の中で刺さった。それは、確信的にそして八幡にとつては致命傷であった。

八幡「いやいやそんな事ないぞ。俺は別に」

結衣「なら、結衣の顔ちゃんと見れる？私だけじゃない、雪乃お姉ちゃんもいろはも見れる？」

八幡「それは…」
分かっていた。

まだ俺には、あいつ達に引け目を感じている。兄妹じゃない俺は奉仕部として、同級生として後輩としてあいつ達を見てしまう。

結衣「ねえ…八幡？何か隠してるでしょ？」

八幡「いや…別に」

我ながら自分を軽蔑してしまっている。なんだよ「別に」って関係が無いように。まるで俺は被害者の様じゃないか。違う知っている今俺は…『加害者』なのだから

結衣「ちゃんと見て！」

八幡「ひっ！」

結衣「おにい、私ねお願いがあります」

八幡「あつああ、俺に出来ることなら」

それまでの結衣の表情とは一変し、真剣に見つめられていた。

結衣「秘密教えて？」

八幡「分かった」

分かっていた。その事実は隠しきれない事だと。俺は全てを話した。奉仕部の事も、本当は俺達は兄妹ではなくただのクラスメイトであり、部活部員であると。

結衣「はあ…そうだったんだ」

八幡「なんていうか、騙したみたいですまん！」

結衣「大丈夫だよ。顔を上げて？ちよつとはビックリしたけどでも秘密を知ったらさ。矛盾が全部合致してるから信じるよ！」

八幡「許して…くれるのか？」

結衣「もちろん!!」

八幡「由比ヶ浜…らしいな」

結衣「私らしいか…あんまり実感わかないなあ。あつ！そう言えばさ私って、おにいの事なんて呼んでた？」

八幡「えっ、えーつとな比企谷さんだよ！そう！比企谷さん。うん比企谷最高！」

結衣「ちゃんと顔見る！」

八幡「ひっ！」

結衣「うそ？」

八幡「えっと…」

結衣「目をそらさない！」

八幡「ひゃい！」

結衣「っで？本当は？」

八幡「ヒツキーって呼んでました」

見事に見破られたぜ！流星がハマさん！尊敬ツス！

結衣「ヒツキーかあ。ヒツキーね！ヒツキー！」

八幡「あつああ、なんだよ」

結衣「じゃあさ、私2人である時はヒツキーって呼んでいい？」

八幡「まあ、いいけど」

結衣「やったー！ヒツキー大好き！」

八幡「うっうう近い近い」

ヒツキーって呼ばれると余計意識してしまうし、唯でさえこの立派

なものからの意識を遠のかせるのに必死なのに。

結衣「じゃあさ、これは私たちだけの秘密ね？」

八幡「ああ、そうなるな」

結衣「はい！じゃ指切りしよ！」

八幡「まあいいけど」

この後、指切りをした。それは、奉仕部にいた頃より由比ヶ浜結衣との距離が縮まった気がした。

でもなりより、由比ヶ浜結衣の笑顔見れて幸せだった。